

元田を襲った結核病は、什って昭和十二年頃だけでもなければ、元田だけのものでもなく、日本全体を風靡したものであったことがわかった。
 とおあれば、その伝染力はインフルエンザの如く、その死亡率と恐怖は現在のガンに劣らなかつたので、結核病に対する記憶は、いつまでも消えないのである。

伝染病だけでなく、この「元田誌」は、明治時代の初期以前、即ち江戸時代からずつとさかのぼつて、記録・資料などない中で、ごく限られた年と場所の記録であることを、十分承知しておきたい。これは、也を得不いことであり、残念なことでもある。その上真実性に乏しい聞きこみの方が多い故、非科学的な点もあり、一冊の書物としての価値も整いことを承知しておかぬばならない。しかしこの点だけで責めただけで、広い立場から真実を迫つていく資料を求めて記録し、後世に残していかねばならぬと思ふ。

参考までに「大分の医療史年表」をかりて、伝染病流行の歴史を知り、私達「元田誌」編さんの反省材料に役立てよう。

(付)
 大分の医療史年表

文政 五(一八三三)	コレラ日本に上陸す
安政 五(一八五八)	コレラ全国的に大流行 豊前豊後で数千名死亡。別府医師天田淳コレラ治療に活躍
明治一(一八六八)	全国的にコレラ大流行 県下で四月に南海部郡 霞ヶ浦に第二号発生 患者合計 五、二七四人 うち死亡 二、九七三人
明治二五(一八九〇)	天然痘流行 県下患者 二、六四一人、うち死亡

明治二六(一八九三)	三、一八七人 赤痢 再び大流行 県下の患者 一〇、三九三人 うち死亡 二、五〇五人
昭和二〇(一九四五)	赤痢流行 県下の患者 二、五八八人 死者 六九三人
昭和二一(一九四六)	天然痘発生、臼井にコレラ発生 患者七人 うち死亡 七一人
昭和二三(一九四八)	日本脳炎大流行 県下患者 二、〇四人 うち死亡 七二人
昭和三六(一九六一)	小児マヒ大流行 県下患者 一、五四人、うち死亡 一人

随想

思い出の食べ物 (その二)
 — おふくろの味・佐伯の味 —

鎌倉市台居住
 会員 神野 幸 人

上南新富戸出身
 (佐伯中学三十三回生)

はじめに
 「親爺の歴史」の中の、食べ物項です。おなを左達(共、娘さんときす)二人お大人になつて、思い出す食べ物があるが、いくつあるか。
 九州の片田舎の貧乏時代、物心づいたとき、戦争時代、軍隊時代、そして敗戦、食糧難、配給、外食者、遅配、欠配、買出し、生法等の言葉も知らない今の若い人達には、想像出来ない食べ物もあるでしょう。(注は編纂子、以下同じ)
 小生の思い出す食べ物、それはテレビでやる料理のことではない。何でござるか、は、読んで自分(注)で判断して下さい。

(一) アンパン

三四歳の頃、蒲戸の文作小父おぢいさんに連れられて船頭町に行き、アンパンを一袋買ってもらった。母の手作り以外は、買い食いなどしたことはない生活の中で、生まれて初めて味わった外食の味だ。大喜びで走り帰った。芳島の家の前で、余り急いだので、「こぼしたことが、印象深く忘れられない。内所川の上手の柳がよい匂いするも頃だった。

筒袖の着物、フエルト帽子スタイルの写真は、小生の記憶した写真一号である。写真とともに忘れないアンパンである。

昭和四年頃だろう。

(二) マクワ瓜

芳島時代(小學校以前)、福美兄と安部亮次兄にくっついて、長島や女島のスイカ畑に遊び、マクワ瓜を失敗したものだ。スリルがあった。時折り、高水牛乳の冷蔵庫に入れて冷やしたが、殆んどは暑い畑で食べたので、味は思ったより悪かった。

昭和五六年頃か。

(三) ニツケ(ニツキ)

佐伯小學校の奉安殿(天皇陛下のお写真と安置する建物)の横に、幹の径エト七五程のニツケ(ニツケイ、肉桂)の木があった。お祭りの屋台で赤く染められて、鉛筆ほどの太さ、長さ四、五センチに束ねられて売られていて、その滋味をすかした味は慇懃まじめだった。先生を目を盗んで小根を切ったものだ。何人か知っていた。木のまわりは掘られて、いつも新しい土で柔かかった。

屋台で売られていたもの比べて、色も悪く味も悪かった。二、三回掘って止めた。

昭和八、九年頃であつたか。

(四) スモモ、ハダンキヨウ

小學校入学前に、福美兄の応援で新聞配達をしていて、小學校三、四年頃は、一人前に近かった。

早朝の武家屋敷は静かだった。そして広い敷地には果物が多かつた。その中の一軒、吉良先生の家はマキ(樺)の生垣に囲まれ、庭にはスモモとハダンキヨウが見事だった。早朝の庭に落ちていた実を拾って食べた。

時には石を投げて落として失敗した。これを五、六個懐にして、かじりながらの新聞配達。美味だった。

(五) 夏みかん

これも山際の武家屋敷坂本家。白い漆喰の土塀で囲まれた庭は、夏みかんが茂っていた。

表門は御影石を敷き、カイツカカイツカの並木が縁したたる風情。裏門は夏みかんの茂みの道を通るので、その候になると、チヨイチヨイ失敗した。

この夏みかんは皮が堅くて、手でばおけなかつたので、新聞を入れる袋にまくして持ち帰り、虎丁とらぢでむいた。すっぱくて重曹じゅうそう(共重炭酸ソーダ)をつけて食べた。父母もこれがめめることはしなかつた。

坂本家のおじいさんは知っていたらしく、何時か「坊や、夏みかん取ってもいいよ」といってくれた。

明治二十六十七年の頃、岡本田独歩が下宿していたのがこの家で、「源おじ」、「春の鳥」、「鹿狩り」の稿を綴った家である。

のだるう。わが家ではよくオジヤをつくつた。

朝食の残りや味噌汁に入れて、寢にかけ、薪をたいて、木の蓋の鉄鍋でつくる。中に油揚げがあるときは、最高の味だ。

親父手作りりの、年輪が大きく渦巻いた飯台の中女に、わらで作った鍋敷を置き、その上に大鍋をのせ、帆立貝で作った貝杓子ですくうオジヤの夕食、夕クアンのお茶で腹いっぱい。

破れ障子の寒の風も、しばし忘れる。

(三) かみなり

これは神野家の独得のものかも知れない。ケンチン汁に似ているが古よつと古がう。大根・人参・牛蒡・里芋などを主とするも、最後に豆腐を入れる。その豆腐は虎丁で切るのではなく、手でぐしゅぐしゅにちぎるように入れる。そしてゴマ油をたらす。これも木の蓋の鉄鍋、薪でたく。コクのある料理、冬の寒さから守ろうとする生活の知恵である。

生活の知恵といえは、牛の脂だ。野村肉店から牛の脂をただで貰う。これをフライパンでやいて油をとり、それをヒビ・アカギレの手足に塗ったものである。

へっぴく

編纂子いう

こんな御愁をそめる話が、八十回ほど続く。文章簡潔、余韻に富み、忘れがちなおふくろの味が、湯然と思ひ出される。今日はいおふくろ、遠ざかってしまった幼少の日々、忘れがちななっているふるさとへの思慕、人々はその愛を失ってしまふまい。

神野氏は四年前にこれをまとめている。今年中毎号掲載の予定、ご愛読を乞う。

記録

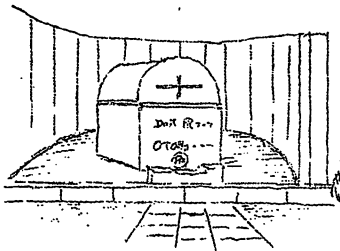
早春の現地研修

① 新春初歩きで津久見市へ

まず一月二日、恒例の年頭初歩き、津久見行きを明日に度量した。行届かない点があり、定刻前佐伯駅に出发し、集まられた官古松山野原三会員にお引とり願う。恒例の沢崎会員にも無駄、ごめいれをさおかけした。おおび申します。

一月三日(火曜) 暴風が吹きすさび、膚をむしむ日であつたが高木会長以下十二名参加、十時半津久見駅下車したが、津久見市役所ご勤務の新友俊秀会員が出迎え下さり、そのご案内で大友宗麟公の墓所を訪ねた。以前の墓が粗末な墓であつたのをなげいて、大友宗麟公顕彰会へ会長上田保が、総額二千万円を越す工費をかけて、昨年十月二日に竣工したものである。キリシタン大友宗麟公には、まことに似つかわしいもので、墓石はイタリ産の白大理石、藩鎗型の壮麗なもので、墓石の正面には十字架が大きく刻まれ、その下にローマ字でドン フランシスコ 大友宗麟と刻まれている。

大友宗麟公の墓



では、古い墓はどうなっているかと思は、右半程よい位置に移築してあるが、これは仏教様式のかかり大きなものである。さらに少しは右にた入り口が右手に、日皇子実三作の「大友宗麟公像」のブロンズ像が立つている。大友の春日清と向い像だが、こちらが台座の上一メートルほどの小さなものである。その横に大理石に刻まれた墓碑の碑文がある。七よりの清田会議員、一流重平く来て、寒風吹きすさぶ中で拓本にたつてい